

山眠る

森岡 正作

紅梅の

一村の目覚めのやうに白鳥来
義士の日の三面記事を漁りをり
来客に居留守を使ふ漱石忌
山眠る銀に榮えし町廃れ
獵期来る山家に大き達磨据ゑ
熊撃の湯ぶねで語る背の傷
狼が来るかも今日の山の音

玄関の前に添え木三本で支えられた梅の木がある。大木という感じではないが相当の老木である。根本は四十センチ余りの老木を重ねて太ると言うより、年々痩せてゆく感じである。暮れに庭師が入り「よく見ろ」と言う。自分の都合か庭の都合に合わせて、予期せぬ時にやって来ては庭の手入れの悪さを叱り、刈り込んだ枝葉の後始末を私に命令する。梅の木は日向の方こそ樹木の姿をしているが、裏に回れば太い幹の半分以上が空洞で、捻れている所は皮一枚という感じで骨と思しきものが無い。空洞に何かを詰める手もあるが、却って何もかもは出来ず、今回は腐りかけている添え木一本を替えた。

それでいて、梅は時となれば馥郁たる香の花を咲かせ、立派な実を沢山付けてくれる。以前に登四郎先生ならば、このような老木の梅を詠んだ句があるかと探してみたが見つからず、〈紅梅のまなじりつよく開きけり〉という御句があった。それに刺激された訳ではないが私も〈老梅の気迫の白と思ひけり〉と詠んでみた。